◇ 松医会のページ ◇

―信州大学医学部同窓会―

私は昨年10月１日付をもって，信州大学医学部医学科内科学第一講座 准教授から，同医学部保健学科検査技術科学専攻 生体情報検査学講座教授に着任いたしました。また，その１カ月後には同期の本田孝行先生が信州大学医学部医学科病態解析診断学講座教授 兼臨床検査部部長に就任されました。これで，第27回昭和56年卒業の我々の同期では由井克之（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科新興感染症病態制御学系専攻 感染免疫学講座），中嶋弘一（大阪市立大学医学部老年医学研究部門免疫学分野），森本恵子（旧姓：村瀬）（奈良女子大学生活環境学部生活健康学），奥寺 敬（富山大学大学院医学薬学教育部 危機管理医学）（救急・災害医学），山村昌弘（愛知医科大学リウマチ科），石黒 精（帝京大学溝口病院小児科）と合わせ８名が教授ということになります。私も含め学生時代からは想像できない現象ではないかと思います。私の所属する保健学科は，平成15年より４年生の学部となり現在に至ります。保健学科に移り様々なカルチャーショックを受けています。まずは，大講座制である点です。保健学科は看護，理学療法，作業療法，検査技術の４つの専攻科に分かれ，それぞれにいくつかの講座がありますが，１つの講座に複数の教授が所属しています。例えば検査技術科学専攻の場合は，生体情報検査学講座に４名の教授，１名の准教授，２名の助教，病因・病態検査学講座には３名の教授，２名の准教授，１名の助教がいます。医学科のように１人の教授に准教授，複数の講師，助教がいるわけではなく，しかも専攻，講座に事務職員はいません。つまり，教授は１人で研究・教育の準備を行い，講義資料の印刷，ごみの処理，食器洗いを含め全て自ら行う必要があります。但し，本年４月から大学院（前期・後期博士課程）が設置されますので，大学院生が入れば研究を一緒に行うことが出来ます。次は，授業のコマ数が多いことです。前期と後期では異なりますが，１時限が90分で，私の場合毎週７時限あります。他の教授は私よりも多い授業数です。さらに，大学院の講義や卒業論文の指導，ゼミナール，就職活動といった多くの業務があります。保健学科では５時限まであり，17時50分が終了ですが，その後もゼミや卒論，修士課程の講義と20時近くまで講義室に学生がいることをしばしば眼にします。私は教授選考の時点から教授になっても大学病院での診療を継続することで了承をいただき，診療の一部を継続していますが，時間的に非常に厳しい状況です。先日，信州大学医学部職員に対して，教員業績審査自己申告書の提出が求められ，その評価が行われました，私は毎週，月曜日，火曜日，金曜日に外来診療を行っているにもかかわらず，診療分野の評価は０点という結果でした。つまり，保健学科の教官は診療しても評価されないということです。勿論，保健学科の敷地では病院のピッチは届きませんし，医学科の試験問題の入力もできません。私以外の保健学科の医師や医師以外の教官も私以上に医学科での教育，大学附属病院での診療を行っており必要性は十分に認識されているはずです。是非とも，評価していただきたいものです。

病院での医師不足が騒がれていますが，医師を支える検査技師，看護師，理学および作業療法士の果たす役割も大きくなっています。現に，信州大学医学部附属病院臨床検査部では医学部の多くの講座と共に共同研究が行われており，検査技師が臨床研究に多大なる貢献をしています。来週，検査技術科４年生の卒業研究の発表会がありますが，その研究内容をみると学会発表と全く同等レベルの内容で驚きました。信州医学雑誌に投稿していただきたいくらいです。また，卒業後の進路をみると８～９名は県内就職で６名は大学院，後は沖縄から秋田まで全国の病院，県職，企業と多岐にわたっています。この信州大学で学び育った人材が全国で活躍するのかと思うと，今後身を引き締めて保健学科の教育，研究指導にあたらなければと思います。

さて，医学部医学科では昨年の10月から医学部臨床研究棟東半分の耐震工事が始まり，半分の診療科は旭研究棟に移っています。階段状になった学生講義室も新しい教室になる予定です。また，５階建ての新外来棟もおおむね出来上がり５月連休明けから運用されます。今の進捗状況を写真に収めましたのでご覧ください。

（文責　松医会理事　保健学科　藤本　圭作）